



No.8 令和4年12月 15 日

ニュースリリース

(公財)さっぽろ青少年女性活動協会
こども育成課
～街とともに 未来を育む 人づくり～

始動!!「行動規範」チーム!!あらゆる危害の恐れから



子どもを守る「チャイルド・セーフガーディング」

札幌市児童会館・ミニ児童会館を管理運営している(公財)さっぽろ青少年女性活動協会こども育成課では、「子どもたちが安全で安心感を得られる精神的な拠り所としての居場所作り」を会館運営の柱の一つとして取り組んでいます。そして、その根幹となる「子どもの安心・安全」に焦点をあて、暴言や体罰、性的虐待等のあらゆる危害から子どもたちを守る「セーフガーディング」の構築を進めています。今回、行動規範チームの始動を、先に全体向けに行いました「チャイルド・セーフガーディングワークショップ」とあわせてお伝えいたします。



ラベルワークで、身近な課題を影響・頻度の度合いも含めて出し合い、その対策について考え合います。(WS)



策定チームは、立候補により構成されました。子どもたちとの関わり、児童会館としての役割の視点からも捉えています。(キックオフ会議)

ワークショップは11月15日に、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 子どものセーフガーディングスペシャリスト 金谷直子氏を講師に迎え実施しました。

～チャイルド・セーフガーディングとは、子どもの権利に反する行為や危険を防止し、子どもの安心・安全な活動と運営を目指す組織的取り組みを指し、子どもに関わる一人一人が子どもと適切な関係を築くことが求められます～

想定事例から行動規範を考えるワークでは、課題意識が全員一致のものも、考えが分かれ意見を交わすものもありました。これらの意見に対し、守るべき原点「子ども・子どもの権利」に立ち返って「子どもの最善の利益には、何が課題であり、何が必要なのか」を捉え明文化する重要さや、過度に意識が働いてしまい、健全な心身発達という安全が守れなくなるのではという不安も聞かれました。このバランスをとり、「子どもまん中」となる行動規範にまとめあげられるかが、私たちの鍵だと自覚しました。

この鍵に向き合う行動規範チームが発足し、12月8日には、金谷氏を交えてキックオフ会議を実施しました。このセーフガーディングは、決して一朝一夕で築けるものではありません。要となる行動規範策定から一つずつ積み上げを重ね、目に見える形として築いていきます。

(公財)さっぽろ青少年女性活動協会こども育成課では、子どもたちが「自分らしく」安心安全にすごせる環境を大切に、子どもの権利が宿る児童会館運営を行っています。私たちは、さらに児童会館に関わるすべての一人一人がその意識を高く持ち取り組むことで、社会全体への「子どもの安全」の浸透を図っていきます。



<(公財)さっぽろ青少年女性活動協会>

札幌市児童会館、ミニ児童会館をはじめ、こどもの劇場やまびこ座・こども人形劇場こぐま座、若者活動センター・若者支援総合センター、青少年山の家、定山溪自然の村、北方自然教育園、千歳市児童館・学童クラブの管理運営をとおして、「人とのつながりによる魅力あふれる未来社会の創造」を実現していきます。

<本件に関するお問い合わせ先>

こども育成課 担当 細川 ikuseika-release@syaa.jp TEL011-671-4121
(公財)さっぽろ青少年女性活動協会 〒063-0051 札幌市西区宮の沢1条1丁目1-10
<HP アドレス> <http://g-kan.syaa.jp>





こども育成課子どものセーフガーディング

行 動 規 範

全ての関係者に以下の行為は許されません

- a どんな理由があっても、叩く・蹴る等暴力を行うこと
- b 罰を目的とした拘束をもって、身体的苦痛を与えること
- c 暴言・無視・脅し・人格や特性を否定する提案・発言など、心理的苦痛を与えること
- d 子どもと性的な関係を持つこと
- e 支援が必要な場合を除き、プライベートゾーンを見たり触る。また見せたり触らせること
- f わいせつなことを連想させる言動をすること。子どもにわいせつな画像や動画を見せること
- g 不適切な身体的接触をすること（発達や個々に応じた配慮について別途注釈）
- h 子どもが困っている状態や危険な状況のまま放置すること
 - i 性的、金銭的、労働力としてなど、いかなる理由においても子どもを個人の利益や欲求のために利用すること
 - j 差別やえこひいきなどによって、他の子どもと異なる扱いをしたり、集団から排除すること。また加担すること
- k 支援が必要な場合を除き、子どもが自分でできることを必要以上に手伝うこと
- l 宿泊行事において、子どもと同室で寝ることや一緒に入浴すること
 - ※ただし支援が必要な状況かつ上長の許可を得ている場合を除きます。
- m 活動外において、子どもや利用者と個人的な連絡を取ったり、取ろうとしたり、会ったりすること
- n 子どもが暴力や虐待の被害にあいやすい状況や環境をつくること
- o 行動規範違反との疑念を持たれかねない行動や状況に自分自身を置くこと
- p 子ども本人及び保護者の承諾を得ずに写真や動画の撮影や使用すること
- q 撮影した写真や動画を私的な理由で使用すること
- r 性的嗜好の対象となるような写真の撮影や掲載をすること
- s 活動上知り得た情報や個人を特定できるような内容を外部に漏らしたり、個人のSNS等に発信すること

子どもと接する際に以下の点に留意する必要があります。

- 1 可能な限り第三者の目が届く場所で、子どもと過ごします。
- 2 子どもの権利を保障する立場であることを自覚し行動します。
- 3 子どもと気持ちを共有し、子どもの声を大切にします。
- 4 子どもの持つ力を信じ、時に関わり、時に見守り、子どもの成長の機会を第一にします。
- 5 子ども一人一人が子どもの権利を理解し意見表明・参画する柱となるよう、子どもの持つ力を引き出します。
- 6 子どもについて職員間で共有しコミュニケーションに努めます。
- 7 子どもの発達・安全に危険を察知した場合は、内外問わず安全確認のため関係機関と連携を図ります。
- 8 事業の前に行動規範に反する活動内容でないかどうかを話し合います。
- 9 行動規範に則り、子どもたちが安心安全に活動できる環境を整えます。
- 10 不適切な行為が見過ごされないように、子どもに関わる一人一人が責任を持ちます。



チャイルド・セーフ
ガーディングの策定
作業を進める児童会
館の職員

児童会館、職員に行動規範

市内運営団体 虐待防止へ策定

札幌市内199の児童会館・ミニ児童会館を管理運営している「さっぽろ青少年女性活動協会」は、子どもの虐待や性的被害などを防ぐため、会館で働く人を対象にした行動規範「チャイルド・セーフガーディング」を策定した。道内外で子どもの人権侵害が相次いでいるため、子どもとの接し方について全職員が共通理解を持ち、館内で安心して過ごせる環境をつくる。

同協会が策定した規範は全部で29項目。このうち19項目は禁止事項として、「暴力を振るわない」「不適切な身体的接触をしない」「承諾なく写真を撮らない」など定めた。残り10項目は子どもと接する際の留意事項として、

第三者の目が届く場所で子どもと過ごすことを基本とするほか、子どもと気持ち共有し、声を大切に聞くなどの内容を盛り込んだ。セーフガーディングは、弱い立場の人を暴力や権利侵害から守る活動のこと。子ども支援専門の公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（東京）など5団体が2020年に「子どもと若者のセーフガーディング最低基準のためのガイド」を国内向けに作り、このガイドを基にした子どもの擁護活動が、子ども食堂や日本サッカー協会などで広がっている。

さっぽろ青少年女性活動協会が策定した今回の規範は、児童会館職員9人が昨年12月から、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの金谷直子さん監修の下、職員の意見も募り仕上げた。職員からは策定前、「子どもの

着替えはどこまで手伝えるのか」「1対1での個室での指導は大丈夫か」などと戸惑う声があったという。学校や保育施設などでは

近年、大人から子どもへの暴力や性的虐待などの事件が続いているため、同協会は規範を周知し、子どもの人権を再認識する機会にする考え。規範は18日の職員向け講習会から運用を始めた。同協会こども育成課の小森珠恵係長（49）は「セーフガーディングの完成をスタート地点として、各職員が人権を守っていくように運営したい」と話す。

児童会館の主な利用者は0～18歳。放課後に留守家庭となる子の「児童クラブ」や、乳幼児と保護者が交流する「子育てサロン」などの活動を展開しており、22年度には市内全199館で330万4676人が利用した。（高田かすみ）

©北海道新聞社